

# 博士論文の要旨

氏名 プラダン ゴウランガ チャラン  
PRADHAN GOURANGA CHARAN

論文題目 19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容—夏目漱石の「英訳方丈記」を中心に—

本研究は、日本の古典名作『方丈記』が19世紀後半においていかに海外に伝播し、20世紀初頭までに英米を中心とした西洋でどのように受容されたのかを解き明かす試みである。

『方丈記』は成立してから現在に至るまで様々な観点から受容され、連綿と関心が注がれてきた。また、本作品やその作者である鴨長明に関しても数多くの研究がなされてきた。これらの先行研究の多くは、もっぱら国内におけるその受容とそれに関わる諸問題について論じたものである。ところが、この作品は明治中期という早い時期に外国人からも注目を集めており、海外でも受容されてきた。実は『方丈記』は19世紀末・20世紀初頭に西洋で読まれた数少ない日本文学作品の一つであり、19世紀末頃には既に世界文学の一部に組み込まれていた。にもかかわらず、このような観点から『方丈記』を捉えた研究はこれまでさほど行われてこなかった。本研究は、『方丈記』を世界文学の一部として捉え直し、本作品がいかに海外で受容され、どのように読まれたのかを明らかにすることを目指している。

『方丈記』が世界で流通する過程には、文豪夏目漱石が大きく関わっている。漱石は東京帝大在学中に、英文学科の教授であったディクソン（James Main Dixon）の依頼で本作品の最初の外国語訳である英訳に携わった。ディクソンは、漱石の英訳を下敷きにして長明と英国の詩人であるワーズワースを対比した論文を執筆し、『方丈記』の英訳とともに日本アジア協会の会報に掲載した。これによって初めてこの作品は海外の読者の手に届いたのである。したがって、漱石とディクソンが示した『方丈記』に対する理解は、海外における本作品の受容を検討する上で重要な意味をもつと考えられる。そのため、本研究は漱石の「英訳方丈記」に主眼をおき、19世紀末・20世紀初頭の英米における本作品の流通の様相を追求し、その受容の諸側面を明らかにすることを目指す。

第1章では、鴨長明の生涯と『方丈記』の成立に関する概要を提示し、本作品が中世期から江戸時代を経て明治中期までにどのように読まれてきたのか、その受容の特色を確認した。『方丈記』に言及した中世期の文学作品が、本作品ないし長明をいかに捉えたのかを考察した上で、江戸時代に成立したその注釈書などを取り上げ、それぞれの『方丈記』受容の様相を考察した。そして、外国人が本作品に関心を寄せた明治中期

に至るまでに『方丈記』がどのように受容されてきたのか、その特徴を提示した。

第2章では、西洋人として『方丈記』に初めて強く関心を持ち、漱石にその英訳を依頼したディクソンについて検討を加えた。特に、先行研究ではディクソンの来日以前の経歴や国内外における学問的な業績について不明な部分が多かったため、この点を中心に考察した。まず来日以前のディクソンの伝記を整理し、日本国内における彼の業績を明らかにした。12年以上にわたる在日期间において、彼が日本の英語教育の担い手になった次世代の学者をいかに育成し、英語教育用の教材作成に力を注いだのかを確認した。同時に、彼が日本の女子教育の発展にも深く関わっていたことを明らかにした。なお、渡米後のディクソンはアメリカの大学で日本に関する研究の発展のためにも尽力した。晩年のディクソンは20年以上にわたって南カリフォルニア大学に勤務し、彼の指導によって東洋学部が新設され、この大学はアメリカ西海岸の日本学の一つの拠点となった。本章の末尾では、このような渡米後のディクソンの活動と、日本学に対する彼の功績についても言及している。

第3章では、漱石が『方丈記』英訳と同時に執筆したエッセイを中心に考察を行っている。漱石の英訳を対象にした従来の先行研究では、漱石と『方丈記』の関係や原文と訳文の比較検討を中心に行われてきたが、『方丈記』の受容という観点からの考察やディクソンが漱石の『方丈記』理解にいかに関与を与えたのかについて注目した研究は管見の限り見られない。そこで本章では、ディクソンが漱石にどのように翻訳を依頼したのか、その過程を跡付けるとともに、漱石の英訳とエッセイの解析を通じて漱石の『方丈記』理解の特徴を明らかにした。漱石は『方丈記』の従来の解釈を踏襲せず、本作品をイギリスのロマン主義的な自然作品に近いものとして解釈し、鴨長明を英国の詩人ワーズワースと比較している。漱石によるこのような解釈の背景には、大きな要因としてディクソンの存在があったとみられる。なお、漱石の英訳本文の分析を通じて、これまであまり注目されてこなかった漱石の翻訳思想についても検討を加えた。

第4章では、漱石とディクソンが執筆したエッセイと論文及びそれぞれの英訳の内容を分析し、両者の『方丈記』理解の差を明らかにするとともに、ディクソンが漱石の『方丈記』解釈をいかに受け入れたのかを考察した。その結果、ディクソンは自身の論点に適した内容を漱石のエッセイから取り入れ、英訳に関してはほぼそのまま漱石の訳文を再利用したことが確認できた。ディクソンは漱石の論考を継承して、長明を英国の詩人ワーズワースと具体的に比較検討し、前者の自然観が後者よりはるかに劣ったものであると主張した。さらに、ディクソンが日本アジア協会でこの論文を発表すると、西洋人の聴衆は、長明を西洋の文化的な枠組みを通して理解しようとし、批判の対象にしたのである。

第5章では、19世紀末・20世紀初頭の英米を中心としたこの作品の流通及び受容について考察を行った。まずは、1896年にアメリカで刊行されたロジャー・リオーダン・

高柳陶造の共著 *Sunrise Stories : A Glance at the Literature of Japan* に見られる『方丈記』の描写を分析し、作者の『方丈記』理解を明らかにした。また、本書の作者がディクソンの『方丈記』英訳をいかに継承し、鴨長明をアメリカの自然崇拜者であるソローに譬えた本書の見方に、ディクソンの『方丈記』論がどのような影響を与えているのかを考察した。次に、日本学者アストン著『日本文学史』（1899）に収められた『方丈記』英訳を取り上げ、彼が英訳に利用した底本を明らかにした上で、彼の『方丈記』理解について検討した。続いて、南方熊楠・ディキンズの『方丈記』共訳（1905）に焦点を当て、ディキンズの翻訳依頼の詳細を調査するとともに、熊楠が英訳に使用した底本について考察した。なお、この英訳の題目では長明が「12世紀の日本のソロー」と紹介されている。先行研究ではこの題目は熊楠が付けたものであると指摘されてきたが、実際にはディキンズによって付されたものである。本論ではこのことを明らかにし、さらにこの題目がいかに漱石の『方丈記』論から影響を受けたのか考察した。次に、1912年にイギリスで刊行された著書 *Myths and Legends of Japan* に収録された『方丈記』の描写を取り上げた。著者のデイヴィスはなぜ長明を「真の自然崇拜者」として捉えたのだろうか。ここでは20世紀初頭のイギリスの時代背景に鑑みつつ、デイヴィスの『方丈記』解釈の内実に向かった。最後に、1933年にイギリスの詩人バンティングが書いた“Chomei at Toyama”という英詩を検討対象にし、彼がなぜ散文であった『方丈記』を英詩に書き換えたのかを検討した。そのような検討作業を通して、この詩がエズラ・パウンドや W.B.イェイツなどモダニズム運動の指導者の影響下で形成されたことを明らかにし、作者の『方丈記』理解の特徴を明らかにした。

以上の考察から19世紀末・20世紀初頭の英米における『方丈記』の受容は、夏目漱石が提唱した『方丈記』論により大きく影響を受け、本論で取り上げた『方丈記』の読者は、それぞれが置かれた状況に左右されながら、漱石の『方丈記』理解を継承したことを結論付けた。